

東方キリスト教の超域的な人の繋がり アントニイ・フラボヴィツキイと在外ロシア正教会の事例から

近藤喜重郎

1 はじめに¹

人はひとりでは生きていられない。その点においては男も女も²、日本人もユダヤ人も、大人も子供もない。人は人との繋がりの中で暮らしを営み、社会を言挙げし、歴史を紡ぐ。人の営みの総体を文明という³。文明という言葉はまた、人の営みの所産をも意味する。人と人の繋がりとその営みの総体としての文明に像を与え、所産としての文明の像は、そこに人の繋がりがあったことを物語る。人は、時代や場所の異なる文明の像を、自分の暮らしが属する文明の像を頼りに、また、その遺された所産の一部から類推して描き出す。歴史を紡ぐとは、そうした知的な営みである。

本稿が目指すのは、東方キリスト教において人の繋がりがいかに超域的⁴であるかについて、19世紀後半から20世紀に欧州に生き、20世紀のいわゆる戦間期にロシア社会の精神的な側面に大きな影響を及ぼしたアントニイ・フラボヴィツキイ Антоний Храповицкий (俗名アレクセイ・パーヴロヴィチ Алексей Павлович, 1863-1936) というひとりの聖職者と、彼が中心となって設立した在外ロシア正教会という個別の事象に光を当てて考察することである⁵。

日本で東方キリスト教というと、東方正教会、ギリシア正教会、ロシア

正教会という言葉は聞き覚えがあっても、その内容についてはよく知らない、という人が多いようである⁶。例えば、キリスト教世界には、「教皇」「パパ」という言葉がある。これは日本では一般に、イタリアのローマにいる人物を指す言葉として知られているが、実は、この言葉は、古くからエジプトはアレクサンドリアのキリスト教会の最高指導者に対する尊称であり⁷、今もアレクサンドリアに教皇がいる。言い換えれば、キリスト教世界には二人の教皇がいるということになる⁸。このことはしかし、日本ではあまりよく知られていない。

2 信仰による人の繋がりをもつ超域性⁹

「人の繋がり」という言葉はふつう目に見えないものを指す。実際に目に見える紐や鎖で繋がられる人は、奴隷や犯罪者などである。「運命の赤い糸」という言葉は、将来出会うであろう恋人との別れ難い関係を表し、ロマンチックな響きを伴うが、やはり<目に見えない>というところが肝要であろう。日本語に「縁」という言葉があるが、やはりこれも目に見えない人の繋がりを指す言葉である。

本稿ではこの目に見えない人の繋がりを、アントニイ・フラボヴィツキイというひとりの聖職者とロシア正教会に光を当てて考察する。聖職者は、「信仰」によって人の繋がりを形作り、保つことを自らの使命とし、教会は、「信仰」によって繋がれた人の集団であるが、この「信仰」というものも目に見えない。

「信仰」は目に見えない。ゆえに人は昔から、これを目に見える形にする努力を続けた。この種の努力の所産のひとつが、いわゆる偶像であるが、

「信条」または「信経」もそれに該当する。ロシア語でこれを、《С и м в о л
в е р ы》といい、日本語にすると、「信仰の象徴」というような意味合いになる。ロシア正教会ではこれを、「キリスト教信仰の基礎の簡潔な叙述」などのように説明している¹⁰。つまり、目に見えない信仰を、言葉を道具として目に見えるようにしたものという意味合いである。

この意味で、東方正教会の信仰は、ニケヤ・コンスタンチノーブル信条という、4世紀後半（381年）に制定されたものに表されているということが出来る¹¹。なお、現在のローマ・カトリック教会でいう「ニケヤ・コンスタンチノーブル信条」は、それが神学的に正しいかどうかという話は別として、381年に制定されたものではなく、何世紀も後に修正されたものである点に注意が必要である¹²。

日本語で「信条」というものをロシア語で「象徴」というのはなぜか。象徴（英 symbol）という言葉は、古代ギリシアで〈条件付きの記号〉として考えられたものである。ゴンザレス（2002：79）はこれを、古代ローマ帝国において、「将軍が使者を遣わす時に、本物の使者であることが分かるようにするために」持たせた「証拠のしるし」によって例示している。この意味で言葉も条件付きの記号であるから¹³、象徴に含まれる。象徴はまた、20世紀に現代記号論の祖であるパース（1986：12）が、図像（英 icon）・指標（英 index）と共に定式化を試みた概念であるが¹⁴、このうち図像もまた、東方正教会の信仰をよく言い表す言葉のひとつである¹⁵。日本語では、東方正教会の信仰との関連で語られる時、聖像またはイコンという。

イコンは、高橋（1998：166）やカヴァルノス（1999：58）によると、目に見えない信仰を、色と形を使って目に見えるようにしたものだという。イコンを礼拝で用いることは古くから続いた習慣であるが、8世紀後半

(787年)に、西洋史でいうイコノクラスム、イコン破壊運動への反論が正統な教え、すなわちニケヤ・コンスタンチノーブル信条に言い表された信仰を正しく伝えるものとして認められ、今に継承されている¹⁶。

以上の通り、東方正教会における人の繋がり、目に見える形ではイコン、文字にして読め、耳に聞こえる形ではニケヤ・コンスタンチノーブル信条によって示されると言えよう。そして、そのようにして示される東方正教会は、確かに地中海世界東部および東欧に顕著にみることができる。

以上の通り、信条もイコンも条件付きの記号である¹⁷。ゆえに、これらをよく理解するためには、その条件、すなわち、それを定めた時代や地域の風習、そして、その地域で継承された考え方などを知る必要がある。言い換えると、「信仰を継承する」とは、信条の文言やイコンのデザインを暗記するというのは大事であるが、むしろそれらを定めた時代や地域の風習、そしてその地域で受け継がれた考え方を自分の常識と照らして、相互に相対化した上で理解して継承するという、言い換えると、信条を定めた時代・地域の人々との繋がりの中で自らを理解しようとする超域的かつ知的な営みなのである。

日本に東方正教会の信仰を伝えた、ロシア正教会の宣教師ニコライ・カサートキン（Николай, К. 1836-1912）は、信仰を日本で広めるに際し、「伝教規則」（1867年）を定めた。これによると、伝教者（信仰を伝えるために訓練を受けて派遣される一般信徒）は、まずは派遣された町で地元民の相談相手となることから活動を始め、講義所を開き、信条の文言を講釈することになっていた。講義所に通う人は、信条を諳んじられるようになるまで、その講釈を聴き、分からないこと、違和感を覚えたところがあったら伝教者に尋ねて疑問点を解消すること、そして、伝教者は、信

条の内容に合点が行き、それが自分の信念と合致すると確認した人に洗礼を勧めて同意を得られたら司祭を紹介すると定めている。これら一連の活動が、伝教（伝道・宣教）であるということであろう。

3 キリスト教における東方と西方¹⁸

キリスト教における東方と西方の相違は、キリスト教の出発点がもつ超域的な位置付けに関係している。すなわち、キリスト教は、地理的には地中海東部のイスラエルで発生した宗教であるが、当時の地中海東部は、政治的にはローマ帝国の領土であり、文化的にはヘレニズム文化圏に属していたのである。

このため、草創期のキリスト教会、すなわちイエスの教えを真理と認める集団は一枚岩ではなかった¹⁹。とはいえ、キリストの教えは真理に基づくと考えた点は一致していた²⁰。真理に基づくという観念は普遍を志向する。自らの教えが真理に基づいているとの主張や、それが普遍であるとの考えは、キリスト教に特異というわけでは決してない²¹。ただし、この考えは、「エクレスシア・カトリケ（共同（普遍）の教会）」という表現と不可分の関係にある²²。

イエスの教えの真理性と普遍性への志向は、イエス自身が「口頭のコミュニケーション手段の組織化」²³によって一度は方向付けたが、この基礎はイエスの死後パウロによって大きく傷つけられた。その代りにこれを担保する制度として新たに注目されたのが、主教職²⁴を中心とした位階制であった²⁵。これは、主教との繋がり、主教との一致をその集団とその教えの真理性の根拠とするという考えである。ただし、地域を超えて問題が生

じたときは、その解決のために複数の地域の主教らが集まる場を必要とした。これを「公会」と呼ぶ。教会の真理性の根拠は、主教個人の見解ではなく、より多くの主教の同意に基づく、すなわち主教職の一致に求められたのである²⁶。

公会は、迫害時代には諸々の地方で開かれた。開催地は主に各地の首府（英 metropolitan）であった。このことから、首府の主教も府主教（英 metropolitan）の尊称を得、その主宰を委ねられることとなった。しかし、時代が進むにつれ、地域を超えた公会が招集されることが続き、その主宰となるべき主教の立場が問題となった²⁷。将来的には全地の主教が招集される全地公会が教会の普遍性を担保することが期待された。

全地公会への期待は、4世紀に政治的繋がりを伴う形で実現した。ガレリウス帝の寛容令（311年）によるキリスト教の容認とコンスタンティヌス帝のキリスト教改宗（312年）の後に、キリスト教は、改めてその教えの普遍性と真理性を求められたのである。当時、シリアのアンティオケアとエジプトのアレクサンドリアを中心として、それぞれ古代から続く学問的伝統に則った聖書解釈が展開された結果、異なる神学が提出されていたため、どの説が帝国の後ろ盾を得るかが問題になった。

最初の全地公会は、皇帝が325年にニケアで招集した。この公会では、神学論争の解決のほかに、ローマ、アレクサンドリア、アンティオケアの三都市の主教座を教会の中心とすることが決められた。ところが、その5年後にコンスタンティヌス帝が遷都すると、新たな帝都（コンスタンチノーブル）の地位が問題となった²⁸。381年に新たな帝都で第二回となる全地公会が開かれた。ここで、ローマ、コンスタンチノーブル、アレクサンドリア、アンティオケア、エルサレムの五都市の主教を総主教（英 patriarch）

とし、府主教の上に位置づけた。このことは、ローマとアレクサンドリア双方の主教の不満の種となった²⁹。

4世紀には別な側面で新たな展開もあった。すなわち、キリスト教は上述の通り、帝国東方が発祥であり、帝国西方への浸透は遅かったのであるが、4世紀に入り、急速に西方に浸透したのである³⁰。この変化は、上の動向およびテオドシウス帝によって他の宗教が禁止されたことと無関係ではなく、ロシア革命前後の4年間に、共産党員が急激に増大し³¹、革命家の集団が特権分配の集団へと変質したことを彷彿とさせる。

加えて、ギリシア語のできない知識人が西方で増えていった。例えば、4世紀の西方キリスト教を代表するアンブロシウスは、ラテン語とギリシア語の両方ができた。ところが、彼がキリスト教に導き、のちにローマ・カトリック教会で最大の聖人となるアウグスティヌスは、ギリシア語にほとんど関心を寄せなかった。アンブロシウスとアウグスティヌスとは、15歳程度の年齢差であるが、二人の神学にはかなりの相違があるという³²。

さらに、西暦410年のローマ略奪以後、政治的後ろ盾を失ったローマ主教は、征服者であるゲルマン民族から保護を得られるよう努力する中、従来のキリスト教会にはなかった慣習を導入し、従来のキリスト教会とは似て異なる組織を作り上げていくことを強いられた³³。森安(1991:16)は、これをローマ教会の「ゲルマン化」と呼ぶ。上述の、ニケヤ・コンスタンチノーブル信条の修正も、「ゲルマン化」の過程の中で強いられたもののひとつとすることができる³⁴。

ローマ帝国で拡大・発展を遂げたキリスト教会は、上述の通り、当初からエクレスシア・カトリケを志向した。ゆえに、ローマ主教が作り上げた新たな仕組みの教会を、ローマ型カトリック主義教会という意味合いで、ロ

一マ・カトリック教会と呼び、旧来のカトリック教会から区別する。世界史にいわゆる東西教会の分裂は 11 世紀の出来事として知られるが、東西両陣営の対立の原因は、何世紀もの間に幾重にも積み重なっていたのである。

また、ローマ帝国内部のキリスト教の攻防は、ローマ帝国の外で暮らす人々の間にも亀裂を生んだ。特に、カルケドンで開かれた第 4 回全地公会（451 年）で「キリストは真に神でありまた真に人である」と考えるキリスト両性説が正統と見なされると、これに同意しないシリアとアフリカの教会は、ローマ帝国内の教会との交流を避けるようになり、のちに非カルケドン派東方教会と呼ばれる独自のグループを形成した³⁵。

ここで、非カルケドン派でも、ローマ型でもないオーソドックスなカトリック教会が地中海世界東方にあるという事実が浮かび上がる。「オーソドックス」という言葉は、ギリシア語で「正しい」を意味する「オルソ」と「教え」や「賛美」を意味する「ドクサ」から成る複合語である。ゆえに、「正しい」「教えの」「教会」、すなわち、「正教会」と訳される³⁶。

こうして、キリスト教東西の分岐は、聖書解釈の相違に由来するものとそれ以外に分けられる。言い換えると、全地公会の決議に従って分岐した諸教会は、同じ聖書³⁷によって信仰を養われており³⁸、聖書正典をめぐる論争で分かれたグループとは一線を画している³⁹。とりわけ、東方における分岐は、『新約聖書』に書かれたナザレの人イエスに神を見るか、それとも人を見るか、それとも神と人の両方を見るか、という神論と人間論の違いに由来するものといえる。

4 アントニイ・フラポヴィツキイへの注目⁴⁰

次に、正教会の信仰をロシアで継承しているロシア正教会で主教として大きな働きをなしたアントニイ・フラポヴィツキイを取り上げる。

生年は 1863 年、ロシア帝国北部ノヴゴロド県はフラポヴィツキイ家の所領ヴァタギノ村で生まれ、没年は 1936 年、ユーゴスラヴィアで葬られた。享年 73 歳であった。

ロシア文学の世界では、ドストエフスキイ（Д о с т о е в с к и й，
Ф. М. 1821-1881）やトルストイ（Т о л с т о й，
Л. Н. 1828-1910）の同時代人である。特に若い頃、ドストエフスキイの作品を愛読した。ド
ストエフスキイの『カラマゾフの兄弟』が刊行された 1880 年当時、アン
トニイ、当時のアレクセイはギムナジウムの生徒であった。これが出ると、
『カラマゾフの兄弟』の主人公であるアリョーシャは、このフラポヴィ
ツキイがモデルではないか、という噂が立ったという。

また、ソ連創始者のレーニン（Л е н и н，
В. И. 1870-1924）の同時代人である。ロシアの革命政権を担った人々は、後述の通り、その人が自由主義者であれ、社会主義者であれ、皆、アントニイの社会的抹殺を企てた。それほど影響力を持ち、危険視された人物がアントニイであった。さらに、ロシア思想の分野では、ベルジャーエフ（Б е р д я е в，
Н. А. 1874-1948）やブルガーコフ（Б у л г а к о в，
С. Н. 1871-1944）といった人々が西欧で知られ、日本でも一時期、実存主義が流行った時代にこれらの人々が紹介されたが、アントニイは、ベルジャーエフらの論敵の一人でもあった。

このように、アントニイ・フラポヴィツキイは、文学、政治、思想の世

界でそれぞれ一定の注目を集めた。しかし、注目の集め方が、政治の分野では左派の、思想の分野では実存主義者の論敵という形であったため、その名は死後、ソ連時代を通じて亡命ロシア人社会を除きタブー視された。そして、ソ連崩壊後の1990年代からロシアでもその見直しが始まり、「数百万のロシア移民の精神的指導者」、「霊的師父」として再び注目されるようになった。

そこで次に、彼が注目を集めるに至った経緯を、主として2007年に出版されたその論集⁴¹の序文に基づいてまとめる。

ノヴゴロド県で生まれたフラボヴィツキイは、帝都ペテルブルグのギムナジウムに入学した。ギムナジウム時代には、帝都の大聖堂の礼拝で主教の補佐をし、日本のニコライが帰国した時には、その補佐をしたこともあった⁴²。1881年にギムナジウムを卒業すると、父親の反対を無視して、ペテルブルグの神学院に入学した。そして、神学院卒業と同時に修道士に志願し、その時にアントニイの名を授かった。

翌年には、旧約聖書科の助教授になったが、その3年後には、掌院に昇叙され、神学院長に任命され、さらに翌年、モスクワ神学院の院長に任命された。以上のキャリアは、一見すると、たいへんな出世であるかのように思われるが、これは、彼を帝都から追放するための方便でもあった。というのも、彼が熱心に教育活動に携わった結果、修道士を志願する神学生が増え、このことが帝都の指導的立場にあった保守層に疎まれたからである。

当時のペテルブルグ府主教は、30歳未満の若者が修道士になることを好ましく思わなかった。なぜなら、ロシア正教会は、ロシア帝国の国教会であり、その修道士は将来の主教候補になるからである。主教候補は、将来

の国の運命を担う大切な役割を果たすと同時に、その立場を保証する様々な利益と特権が与えられる。このような事情があったことから、帝都の府主教は、社会に出て、社会生活を経験したうえで修道士を志願する人を歓迎したのである。

他方、モスクワでも熱心に教育に従事したアントニイは、トルストイを批判する著作活動を始めた⁴³。アントニイ 27 歳から 30 歳のことである。しかし、このことも教会の上層部から好ましくは思われなかったようで、さらにモスクワから遠く離れた、カザン神学院の院長に任命された⁴⁴。

その後も、アントニイはその働きが認められて主教に昇叙されるが、その後の任地は、教区が最も多いウファであったり、正教会最西部のヴォロニニであったりと、とにかく忙しい地域を担当するように仕向けられた。

それでも、その仕事ぶりは注目に値するもので、1912 年には大主教に昇叙され、1913 年にはカザン神学院から神学博士号を授与された。また、1913 年には、コンスタンチノーブル総主教教会から、現在のウクライナ西部とルーマニア東部に当たるガリツィアおよびカルパチア地方の総主教代理職に任命された。翌年には、ハリコフ主教に任命された。

教会管理の激務を担いながら、アントニイは、信徒教育のために反ルナン論を執筆した。ルナン (Renan, J. E. 1823-1892) の『イエス伝』は日本語でも読むことができる有名な本であり、ロシアでも繰り返し翻訳が出版されたが、キリスト教信仰に立って書かれたものではないので、アントニイの批判の対象となった。アントニイ 51 歳のことである。

時代の中で信徒の求めに応える高德の主教としての姿勢は、第一次世界大戦が始まると、アントニイを政治的な対立の中に導いた。アントニイは、信徒からの問い合わせがある関係で発言したのだが、その内容が、今でい

う極右の人々の発言と同種のものであったため⁴⁵、政治家の目に留まることになったのである。

まず、ロシア皇室と帝国政府は彼を篤く遇したが、1917年の二月革命後に自由主義の貴族が中心となって担当した臨時政府は、教会に圧力をかけ、アントニイを修道院に隠退させた。するとアントニイは、教会管理の業務から執筆活動へと自分の情熱の対象を切り替えた。当時、宗教哲学者らの議論も活発であり、アントニイもその議論に加わろうとしたのであろう。

ところが、臨時政府のもとで教会改革が始まり、教会の民主化が進むとアントニイの境遇はさらに変化していった。帝政時代の教会では、皇帝が人事権を独占する聖務会院⁴⁶が主教区主教の配属を決定した。これを臨時政府は改革し、各主教区は、自らの主教を生存中の主教から独自に選出してよいことにした。すると、ハリコフ主教区は、自らの主教にアントニイを選出し、全国の修道士らは、全ロシア公会における修道士の代表者にアントニイを選出したのである。

臨時政府は、自らの自由主義の理念に沿って始めた教会改革の結果、皮肉にも自らがかつて帝政時代の制度を利用して隠退させたアントニイの復帰を許したのである。

そして、ロシア正教会の最高指導者である総主教を選出する選挙が行われると、アントニイは、159票中101票を獲得して、総主教候補に選ばれた。これが普通の民主的な選挙であれば、アントニイが総主教になっていたであろう。ところが、この時、総主教は3人の候補の中からくじ引きで決定することになっていて、最終的に選出されたのはモスクワ府主教チーホン（Тихон, Б. 1865-1925）であった。アントニイは、ロシア正教会でもっとも由緒ある地位のひとつであるキエフ府主教の地位に就けられ

ることになった。アントニイ 55 歳のことである。

5 在外ロシア正教会の創設への期待⁴⁷

アントニイがキエフ府主教に任命されたのは、ひとつにはそれが由緒ある地位であるという理由があったが、ほかにも理由があった。前任のキエフ府主教は撲殺されて、その職が空いていたのである。ここでも、混乱するキエフの教会を管理するという大変難しい仕事に、アントニイの実力が求められたといえよう。そして、この期待の延長線上でアントニイは、在外ロシア正教会創設という難事に取り組むことになるのであるが、そこにはロシア内戦という政治的文脈があった。

まず、内戦中、キエフの街は、入れ替わり侵入する軍隊によって混乱が生じた。その中でアントニイも捕縛され、連行されるなど、落ち着いてキエフの教会の問題に取り組むことができなかった。そして、1919年に白軍が亡命すると、それに随行していたアントニイは、一緒に亡命し、ギリシアのアトス山の修道院に隠退することになった。やはり、ここでも著作活動に専念するつもりだったようである。

ところが、そんなアントニイのもとに、白軍を再編成したヴランゲリ將軍（Врангель, П. Н. 1878-1928）から連絡が入り、クリミアに自治共和国を作るので、その精神的指導者になって欲しいとの要請があった。これを受けて、アントニイはクリミアに入った。

折から、モスクワ総主教庁（ロシア正教会の最高機関）から次の布告が出ていた。

1920年11月、モスクワ総主教庁の布告より⁴⁸

「もし、神聖なる聖務会院と最高教会会議が何かの理由により自らの教会行政活動を停止させたなら、その場合、主教区主教は、職務に即した指導を指示するために、また最高教会管理局〔聖務会院と最高教会会議のこと〕に起源する規則に即して問題を解決するために、至聖なる総主教または至聖なる総主教により、このために示されるであろう人物または機関に照会すること。

もし、主教区が戦線の移動、国境の変化などに従って最高教会管理局とのあらゆる交流の外におかれるか、または至聖なる総主教が率いる最高教会管理局そのものが何かの理由により自らの活動を停止させるかした場合、主教区主教は、同じ条件にあるいくらかの主教区のための教会当局の最高機関を組織するために、隣接する主教区の主教と遅滞なく連絡を取ること。」（下線強調は引用者）

ここには、「何かの理由により」とある。これは「ポリシェヴィキ（後のソ連共産党）の迫害により」と書くわけにはいかないので、曖昧にしてあるのである。また、「戦線の移動、国境の変化などに従って」とある。これは当時、第一次世界大戦とロシア革命の結果、旧ロシア帝国領に属していたポーランド、バルト諸国、コーカサス地方などが独立したことを受けている。なぜなら、教会は行政区分に従って組織されるというのが、ローマ帝国以来の正教会の原則だからである。そして、この布告を受けて、ポーランド、バルト諸国、フィンランド、コーカサス地方では、それぞれの最高機関が設置され、モスクワ総主教はそれらを承認した。そこで、ロシアの内戦で、白軍支配下にあった教会でも最高機関が設置され、アントニイ

はその最高指導者に選出されたのである。

ところが、その直後に、赤軍の攻撃を受けて、ヴランゲリ軍は亡命、アントニイも亡命を余儀なくされた。

実はこの時、アントニイは、殺されてもいいから、クリミアに残ると主張した。自分の責務は、その土地に残る信徒の指導にあり、自分の命はそのために使いたい、ということであった。

そこで、アントニイをどうしても説得できないアントニイの側近たちは、将軍と相談して、一計を案じた。アントニイを慕う兵士たちが、出国前に無事を祈って欲しいと願っているので、停泊中の船の甲板で礼拝をして欲しいと申し出たのである。そして、アントニイが船に乗ると、彼の側近たちは、わずかに残っていたアントニイの荷物をすべて船に載せ、礼拝が終わらないうちに、船を港から出してしまったのである。

船上で将軍は、亡命者のための教会管理の仕事をアントニイに依頼した。これを受けてアントニイは、コンスタンチノーブル（イスタンブール）で下船した。コンスタンチノーブル総主教教会は、アントニイの保護を受け入れ、ロシア移民のための教会管理局の設置を、アントニイがその責任者であることを条件として認めた。

こうして、アントニイは、移民の信仰生活の保護と指導という課題を担うことになった。

正教会には、移民に関する次の原則がある。すなわち、移民は基本的に移住先の正教会に転籍することになっているのである。実際、ポーランドやルーマニアなどの東欧と、ブルガリアやユーゴスラヴィアなど南欧には現地の正教会があり、日本や北米、エルサレムにはロシア正教会の宣教団とその教会があった。さらに、西欧と南米、中近東にはロシア在外公館付

きの教会があった。ゆえに、移民たちは、その教会に行き、その司祭と共に礼拝に参加することになっていたのである。

ところがこの時の情勢はそれでは収まらなかった。正教会のない地域での暮らしを強いられた移民が多数おり、移民の中には聖職者もいたのである。また、ロシア革命以後にロシアを離れた移民の数は膨大で、各地の正教会がそのままの体制で対応できる人数ではなかった。

当時ロシア移民が流入した主な地域をまとめたのが表1である。

表1 ロシア移民が流入した主な地域とその概数⁴⁹

国	移民数	国	移民数
ポーランド	650,000	ブルガリア	30,000
ドイツ	300,000	フィンランド	19,000
フランス	250,000	トルコ	11,000
ルーマニア	100,000	エジプト	3,000
ユーゴスラヴィア	50,000	アメリカ合衆国	732,000
ギリシア	31,000	合計	2,176,000

以上の問題に対処するのが、アントニイの仕事になった。アントニイを局長とする在外ロシア最高教会管理局は、移民と在外教会の状況を調査して、在外に滞在中のロシア正教会の代表者たちの合同大会を企画した。

アントニイらは、上の大会を開くに際して、当時のロシア移民と在外教会を、主教がすでに着任しているか、滞在している地域（管区）と主教のいない地域（地区）に分けて、次のように整理した。

管区：北米・日本・中国・フィンランド・エストニア・ラトビア・リトアニア・ポーランド・ドイツ，フランス，イタリア，セルビア，トルコ，極東（満州・シベリア含む）

地区：スウェーデン，デンマーク，オランダおよびベルギー，スペイン，イギリス，スイス，チェコ，ハンガリー，オーストリア，ルーマニア，パレスチナとアレクサンドリア，ギリシア，ビゼルト（チュニジア）⁵⁰

そして、大会の企画を練っている中で、セルビア正教会総主教デミトリー（Димитрий，П. 1846-1930）がサポートを申し出た。このおかげで、アントニイは大きな会場を確保できた。デミトリーは、若い時にロシアで神学を学んだ経験があり、その礼としてロシア正教会のために働きたかったという。若い日の学びがもたらした繋がりがあることに現われているといえよう。

この合同大会の開催は、モスクワ総主教の承認を得た。

コンスタンチノーブル総主教にセルビア総主教，そしてモスクワ総主教から認可を得て、アントニイの仕事は、万事が順調であるように思われた。

6 民主主義ゆえの批判⁵¹

在外に滞在中のロシア正教会の代表者らの合同大会は、上述の管区と地区の代表者の連帯，移民生活の中での信仰生活のための情報共有と組織づくりを目的として開かれた。アントニイは、在外教会の包括的管理という前代未聞の難事に取り掛かったのであるが、ここでも政治的繋がりからの

干渉を免れることが出来なかった。ただし、今度は民主化された組織であるがゆえの批判を背負うことになったのである。

実は、各地に散らされた移民・亡命者の共同体には、帝政時代の閣僚、政治家、そして反革命軍の将校らが含まれていた。彼らは各地の教会共同体の名誉議員乃至信徒議員として件の大会に参加しており、その影響は大会初日から現れたのである。例えば、帝国政府最後の首相であるロジャンコ（Родзянко，М. В. 1859-1924）は、大会初日に名誉議員として出席したが、臨時政府に政権を委ねたことを恨みに思う人々の嘲笑と非難を浴びて退席し、以後出席しなかった。

また、大会4日目に遅れて参加した議員から、「革命政権の否認」と「ロシア帝国の復興」を訴えるアピールの作成が動議に上がり、議場に議論を引き起こした。件の動議には、司祭の大半が反対したが、主教らは賛否に分かれて討論した。ある主教は、自分らはロシア正教会全体の公会に参加しているわけではなく、その一部にすぎないので、母国の王位継承についてうんぬんする権利をもたないと主張し、ある主教は、教会は非政治的でなければならないと主張した。これに対してアントニイは、王朝の問題は革命の問題であり、国民の暮らしの問題であるのだから、道徳的問題であると同時に倫理的問題であって、純粹に教会で考えるべき問題だと主張した⁵²。

議論の末、件のアピールの作成については参加議員全員の投票に委ねられることになった。民主的な方法が選ばれたのである。

結果、主教の半数、司祭の8割が反対する一方、一般信徒のほとんどが賛成票を投じたため、アピールの作成は採択された。そして、そのアピールの筆頭署名者は、在外ロシア最高教会管理局局長であり、その会議の議

長であったアントニイになった。

ここでもアントニイは、教会会議の決定に従っている。

件のアピールが世に出ると、モスクワ総主教チーホンは声明を出し、アントニイが「ロシア在外聖務会院及び在外ロシア最高教会管理局議長にしてキエフ府主教」として署名した件のアピールは、「ロシア正教会の公式声明を表明していない」、「教会的意義を持っていない」、「教会法に合致した意義を持っていない」ものと見なす旨を表明した⁵³。

また、モスクワ総主教庁に、今回の問題を解決するための処置を提案した。ロシアでは主教の任免は、総主教個人はなく、モスクワ総主教庁に権限があったのである。総主教は次の2案を提出した。

(1) 在外ロシア最高教会管理局は解体し、アントニイを筆頭とする
その主教らは、教会裁判のためにモスクワへ出頭すること

(2) 在外ロシア正教会のために新たな教会管理局を設置すること⁵⁴

民主化された教会の会議では、理論上、教会法に合致しない動議が議場で挙げられた場合であっても、数で勝る一般信徒の意向が聖職者の意向を抑えて可決させる恐れがある。ロシア革命によって民主化されたばかりのロシア正教会にもその恐れがあったのであるが、まさにアントニイが開催した大会で現実となったのである。それでも総主教は、その会議の決定事項については主教、とりわけ最長老のアントニイにその責任を負うことを求めたのである。

これを受けて、モスクワ総主教庁の主教らは策を練った。総主教の書いた文書を修正し、アントニイの名を削除した上、「[モスクワの] 聖務会院の正常な活動が復旧した後に」「裁定を下す」という曖昧な表現を加えて、解釈の余地を残す形で布告を発したのである。「正常な活動が復旧した後に」

とは、それを述べている時には正常な活動が可能ではないことを示唆している。これを言い換えれば、＜革命政権が倒れるまでこの問題の裁定を下さない＞と読むこともできる書き方であり、モスクワ総主教庁の主教らは、アントニイを守ろうとしたことが分かる。

それでも、モスクワ総主教庁の布告が發布されると、ギリシアのアトス山の修道院、セルビア正教会、アンティオケア総主教教会、エルサレム総主教教会などがアントニイの受け入れを表明し、アントニイの立場を守ろうとした。

他方、総主教は、総主教庁を通さずに済む処置を一つ実施した。セルビアにいた大主教エヴロギイ・ゲオルギエフスキイ（Е в л о г и й , Г . 1868-1946）を府主教に昇叙し、その任地を西欧としたのである。実は、エヴロギイは、先の大会でアピールの作成に反対した主教たちの最高位にあった。また、西欧には、独仏だけでも50万人を超える移民がいた（上掲表1）。総主教は、彼をアントニイと同じ府主教位に昇叙することにより、また一定数の信者の代表とすることにより、アントニイに対抗しうる権威を彼に付与しようとしたのである。興味深いことに、この処置は、その2カ月前に革命家トロツキイ（Т р о ц к и й , Л . Д . 1879-1940）がソ連政治局に提示した対教会政策と見事に合致するものであった⁵⁵。

ところが、一足先にモスクワ総主教によって府主教位に昇叙されていたエヴロギイは、モスクワ総主教庁の布告がソ連政府の圧力によって作成されたものと断じ、これを無視するようアントニイに要請した⁵⁶。これに対しアントニイは、「総主教の意志を実現することが大事」⁵⁷と返答し、その指導下で在外ロシア最高教会管理局は、総主教庁の布告に従い、自らの解体と再編を決定した。

旧来の在外ロシア最高教会管理局は、総主教庁に倣い、常設機関として各管区・地区から選出された主教，司祭，一般信徒の参加する最高教会会議と、一年に一度招集される主教公会からなる合同機関であった。アントニイらは、このうち最高教会会議を廃止し、代わりに常設機関として選出された主教だけが参加する主教聖務会院を設置し、これと主教公会の合同機関を在外ロシア正教会の新たな最高教会管理局とした。その上で、主教聖務会院と主教公会はそれぞれ自らの議長にアントニイを選出した。1922年8月、アントニイ59歳のことであった。

再編前			再編後	
機関名	議員	⇒	機関名	議員
最高教会会議	主教，司祭， 一般信徒		主教聖務会院	主教のみ
主教公会	主教のみ		主教公会	主教のみ

トロツキイの目的は、教会管理からのアントニイの排除にあったが、実際に教会管理から排除されたのは、教会に政治を持ち込んだ一般信徒であった。アントニイらの改革は、司祭と一般信徒が教会管理に参加できる組織から主教のみが教会管理を担う組織への移行であり、一見すると、教会の民主化に逆行する反動であるかのように見受けられる。しかし、それまでの一連の流れに鑑みると、反動ではなく、教会を政治的繋がりから自律させることを優先した結果であることが分かる。

7 総主教なき教会の重責の片翼⁵⁸

1925年にモスクワ総主教チーホンが永眠した。総主教が永眠したなら、ロシア正教会は当然、新総主教を選出するための会議を開かねばならない。そのためにはまた、ロシア全土から主教が集まらねばならない。しかし、そのためには、反宗教政策を掲げるソヴィエト当局による国内旅行の許可が必要であり、当局がそのようなことを認める理由は、当然なかった。この情勢下で、アントニイは母国を離れた信者を導く教会の重責を背負ったのである。

新総主教選出の可能性を絶たれたモスクワの主教らは、故総主教の遺言を公表した。その中では3人の主教が非常時に総主教代理となるべく指名していた。実際には、指名された3人のうち、2人がすでに投獄されていたので、唯一自由の身にあった府主教ピョートル・ポリャンスキイ（Петр, П. 1862-1937）が総主教代理となった。そして、3人の総主教代理はそれぞれが自分の代行を3名ずつ指名した。将来の混乱を避けるための処置であった。

ソヴィエト政府はこの処置を利用した。すなわち、総主教代理とその代行らに指名された主教らに、ソヴィエト政府を認めることに加え、信者全員にソヴィエト政府への忠誠を要求することを要求し、これを拒否した者を逮捕・拘留したのである。その結果、最終的に公の場に残ったのは、総主教代理代行の府主教セルギイ・ストラゴロツキイ（Сергий, С. 1867-1944）であった。彼も一度は政府の要求を拒否したため、逮捕・拘留されたが、1927年に回状（いわゆる「忠誠宣言」）を出した。それには次のような言葉があった。

「我ら教会活動家ら」は、
「教会のために配慮してくださるソヴィエト政権に感謝」し、
「われらの人民およびわれらの政府と共にあること」
「ソヴィエト政権に忠実であること」
「ソヴィエト連邦を市民の祖国とみなすこと」
「すべての社会活動においてソヴィエト政府に対して完全に忠実である
ことを誓う誓約書を提出すること」
をソ連国外の聖職者らに要求する⁵⁹（下線強調は引用者）

この要求の苛烈さは、下線部の「ソヴィエト」を自分の国の与党名やその党首名に変えれば、明らかであろう。セルギイは、総主教代理とその代行が皆、自由な立場からいなくなることを、そして、そのことによりロシア正教会が正統な教会管理の後継者を失うことを恐れ、また迫害が弱まることを願ってこの文書を出したといわれる⁶⁰。

アントニイらは、ソヴィエト政府による迫害の事実を強調して、セルギイの要求を拒否した。すると、セルギイは、アントニイら在外ロシア主教聖務会院のメンバーを罷免する文書に署名、発布した。これに対し、アントニイらは、故総主教の正統な後継者はソヴィエト官憲によって拘留中の総主教代理ピョートル・ポリャンスキイであるという声明を出し、セルギイによる罷免処置は無効であると主張した。

すると、故総主教によって西欧府主教に昇叙されていたエヴロギイは、セルギイにソヴィエト政府への誓約書を提出して、在外ロシア正教会内に独自のグループを形成したが、まもなくセルギイから罷免されてしまう。彼は、カンタベリー大主教に招かれて、共同の祈祷会に出席するためにイ

ギリスへ出かけたのであるが、イギリスでの祈祷文の中にソ連の経済政策への批判が含まれていたため、誓約に反したと咎められたのである。

ロシア正教会の中で立場を失くしたエヴロギイは、全西欧のロシア移民教会を伴うことを条件としてコンスタンチノーブル総主教に自らの保護を要請した。コンスタンチノーブル総主教は、1922年にアントニイを責任者として、ロシア移民のための教会管理局の設置を認可して以来、ロシア移民とその教会の動静を見守っていたが、ここにきてエヴロギイを受け入れ、アントニイ批判に回った。

コンスタンチノーブル総主教がアントニイを批判した理由は次の通りである。すなわち、アントニイが代表する、ロシア移民の為の教会管理局は、コンスタンチノーブル総主教教会の保護下で設立を認可されたのである。ゆえにアントニイとその監理局は、コンスタンチノーブル総主教の管理下にある。しかし、アントニイはその立場を無視して、ロシア移民の教会をモスクワ総主教の管理下にあるかのように指導している。ゆえに非難されるべきであるという。

エヴロギイの行動は、西欧のロシア移民をさらに分断した。ある者はアントニイの指導下に留まり、ある者はアントニイの指導から脱することを目的としてエヴロギイに従ったが、ロシア人としてのアイデンティティを優先してセルギイ派に残る者もあった。

こうして、ロシア移民の教会と各地の正教会は、アントニイ率いる在外ロシア主教聖務会院をめぐって、大きく3つに分かれることになった。ひとつは、アントニイを批判してセルギイ率いるモスクワ総主教教会を支持するグループである。政治的立場はどうあれ、教会法上正当な総主教教会が存続している以上、他の正教会はこれを支持する側に回ることになる。

もうひとつは、アントニイ率いる在外ロシア主教聖務会院を支持するグループであり、これにセルビア正教会と、中国、中近東と南米のロシア移民の教会が入った。さらにもうひとつ、上の問題に関与しないことを表明するグループがあった。例えば、コンスタンチノーブル総主教教会に移籍して、ロシアの問題から自分たちを切り離そうとしたエヴロギイ派があり、北欧のロシア系の正教会もそれに該当する。また、1920年11月のモスクワ総主教庁の布告を意図的に曲解して、独立正教会の設立を図るグループが北米で現れた。

教会がいくつかのグループに分かれたといっても、信仰による繋がりが断たれてしまったわけではなく、その後も主教らは和解を模索した。北米では分かれたグループの主教らが互いのそれまでの歩みを整理したうえで和解に至ることができた。西欧では、アントニイとエヴロギイの和解が成立した後、自由主義の亡命政治家の影響下に置かれたエヴロギイが翻意したため、教会としての和解の実現に至らなかった。

アントニイは、北米で和解が実現したことを見届けた後の1936年に永眠する。アントニイを葬った時、セルビア総主教バルナバは次の言葉を語ったという。

「府主教アントニイは、キリスト教最初期の偉大なる主教たちと同列に置かれるべきである。」⁶¹

これは、アントニイが迫害の中に生きる人々のために生涯心を砕いて働いたという意味であろう。モスクワのセルギイは祖国で生きる人々のために、アントニイは祖国を離れた人々のために、故総主教が心を砕いた仕事

を担い合ったが、その労苦の末、東方正教会の信仰による繋がりには、1930年代後半には、地中海世界と東欧の枠を超えて、西欧、北欧、北米、南米、中東、オーストラリアへと拡大していたのである⁶²。

8 1927年のアントニイの管区回状一前半

次に、アントニイ自身は、自分の信徒をどのような形でどのような人との繋がりへと導こうとしたかを、1927年のクリスマスにアントニイが出した管区回状⁶³に基づいて考察する。上述の通り、1927年の冬は、モスクワのセルギイにとっても、セルビアのアントニイらにとっても厳しい時であった。

アントニイは次のように始めている。

誰か偉大な方、帝か、または貴族か、または尊敬される義人か、または高名な学者がご自分の代理を我らのもとに派遣なさったなら、我らは大いなる喜びをもってその人を迎え、しばらくの時、高貴なる客人を相応しくもてなすためだけに、我らが心配している問題をすべて忘れ、その後は長い間、その方の訪問なさった状況を思い起こし、書き止めては自らの仲間に何度でも読み聞かせるものである。

今や神ご自身が我らのもとにお送りになったのは、代理人ではなく、天使でもなく、御自身の独り子、人のために我らを受け入れてくださる方、自らを苦しみに渡される方である。この方は、罪深きヘロデから死の裁きを受けるほどに貧しくされ、遠く神に見捨てられたエジプトへと慎ましくも逃れ、暴君の死までそこに滞在したのである。（下線協調は引用者）

アントニイは、客人を迎え入れる人の心構えについての一般論から始め、クリスマスのエピソードへ話を繋げている。『新約聖書』によると、イエス・キリストが生まれた時、占星術によりユダヤの王が生まれたことを知った東方の占星術師が、エルサレムを訪問し、ユダヤ王ヘロデの宮廷を訪れ、その目的を語ったという。これを聞いたヘロデは、その後、ベツレヘムに生まれた乳幼児の殲滅を命じたのであるが、その時すでにイエスとその両親はエジプトへ逃亡していたというのである。

アントニイは、この出来事から話を始めることにより、ソヴィエト政府の迫害を恐れ外国暮らしの中でクリスマスを迎えていた人々に、イエス・キリストもまた外国に逃亡したことがあることを思い起こさせようとしている。その上で、「兄弟らよ」と呼びかけ、一般論に比して、自分たちが「祖国への郷愁」を忘れることができるかを問うている。クリスマスというめでたい時に、否、めでたい時だからこそ、祖国への郷愁に捕らわれているであろう移民の信徒に思いを寄せている。

我らに、兄弟らよ、かような高貴なる大地の客人を迎え入れた我らに、たとえこの方が我らの間に靈的にいらっしゃる日々であったとしても、我らに、聖き御堂でその御降誕が祝われている時に、地上の悩み事、憂鬱さ、祖国への郷愁を忘れずにいることが、そしてそれらから遠ざからずにいることが我らにできるだろうか。この時、全地が偉大なる帝と主の祖国となったその時、無数の天使がベツレヘムの儉しい牧人らにその訪れを歌い聞かせたのである。

この問いは、さらに「何によって我らに我らの喜びを、こんにち我らのもとに神の訪れがあることへの我らの感謝を言い表せるのだろうか」と言い換えている。そしてこの問いへの答えは、ベツレヘムの牧人らに関する証言（『マタイによる福音書』2章17-20節）に基づいて、「〔キリストの降誕は〕晴れ渡った心から、感動をもって、霊的な喜びをもって語られている」と語られている。このような形でアントニイは、天使とともに歌い、互いにクリスマスの出来事を語り合うことを勧めているのである。

それはなぜか。

ベツレヘムの牧人らの外見上の暮らしには、その時も、おそらく目についた変化は生じなかったであろう。彼らは夜毎に空の下、動物らと寒い思いをし、食事も貧しいものであったが、みすばらしい洞窟で聖家族と会い、栄えある天使らの歌を聞いたことは、当然、彼らの記憶の中に、そして彼らの心の中にとどまっていたであろう。（下線協調は引用者）

アントニイはここで、羊飼いの外見上の暮らしと内面の相違に着目している。すなわち、イエスと出会ってからも、彼らの食事は貧しいまま、冬の夜には羊たちと寒空の下で眠るという暮らしぶりは変わらなかったが、生まれたばかりのイエスと出会ったことは、彼らの記憶の中に、彼らの心のなかに留まっていたであろうし、そのときに感じた歓喜に満ちた感覚は、彼らの人生を大きく変えたであろうというのである。こう語ることで、外国暮らしの中、住まいも食事も貧しいままで耐えているかもしれない信者を慰めると同時に、聖書の朗読と聖歌の斉唱を勧めている。

9. 1927年のアントニイの管区回状——後半

興味深いことに、アントニイは、続けて、イエスの降誕について人々の間で語られ続けることはなく、人々の間で忘れ去られたであろうという。

そう、おそらく神の御子の更に他の礼拝者らとその洞窟に来たことはないだろう。なぜなら、東方の博士らが生まれたばかりのユダヤの帝を拝みに来て間もなく、聖家族はすでに洞窟を離れ、家の中に落ち着いていたからであり（マタ 2:11）、洞窟は忘れ去られたが、ただ、「マリアだけがその言葉全てを心に留めていた」（ルカ 2:19）。ヘロデ王による幼児虐殺の恐ろしい日々が始まったときに、ベツレヘムの惧いていた住民らは、おそらくは生き残っていた子どもらが打ち殺されることのないよう、素晴らしい出来事について思い出すことを懼れたであろう。

幼児を虐殺されたベツレヘムの住人は、さらなる悲劇を避けるため、祝福された牧人の話を意図的に避けたという。この話の意味は、次の段落で次のように明示される。

同じようなことを、兄弟らよ、いまロシアの正教の人々が、最近まで聖なるルーシ⁶⁴と呼ばれていた我らの祖国で体験している。そこではまた、いまや自分がキリスト教徒であると表明して、生まれたばかりの神の御子への信仰をあからさまにすることは危険である。（下線協調は引用者）

アントニイは、読者であるロシア移民に再び「兄弟らよ」と呼び掛け、当時の移民らの祖国の人々が置かれた苦しい状況を、イエスが生まれた後

のベツレヘムの悲劇と重ね合わせ、本国の同胞への配慮に目を向けさせている。先の「祖国」は、思い出の中にある、いわば過去に属すが、この「祖国」は、現実の中にある、いわば同時代に属するのである。アントニイは、読者の意識を、読者自身の時（「いま」）と同じ時の祖国に向けるよう仕向けている。

そのうえで、自分と読者の共通の責務について次のように語っている。

キリストが神であることを恐れることなく語り伝える責務は、我らキリスト教徒、とりわけ亡命者の上にあるのだ。

我ら、亡命者は、キリスト信仰の迫害者から安全なところにおり、そのうえ、神が我らをご自身の敵の権力から救い出し、その方が神であることを安心して語り伝えることができるよう取り計らってくださったことに感謝しなければならない。〔中略〕最後に、ひとりひとりが自分のことを考えなければならない。旧ロシアにいる我らの血を分けた受難者らに、自分に何ができるか、労働によって援助する機会か、言葉によって支持する機会か、それとも、金銭的な援助によって支援する機会か、それとも他のもっと実践的な方法が何かあるか、彼らがどのような状況にいるか、その危険と今ある不幸とを取り除くために、どんな可能な手段を前にしたとしても、例外なく考えねばならない。（下線協調は引用者）

アントニイの語る移民の責務は、キリスト教の伝道であり、祖国の同胞への援助である。ロシア革命から10年が過ぎ、各地の暮らしに専念しているであろう信者を相手に「自分のこと」として上の二点を教えている。

アントニイが語る亡命者の働きは、キリスト教徒以外の人の目には、ユ

ダヤ人にも当然であった同胞への隣人愛によるものに映るであろう。しかし、アントニイは、次に見る通り、これをキリストの助けによるものだと説いている。

このことは、多くの亡命者が様々な方法をもって行っているが、このことにおいて、そう、聖き幼子イエス・キリストが彼らを助けてくださるであろう。この方こそ、115年前のかの聖なる日々に我らの祖父らを力づけてくださった方、その 200 年前には全ロシア総主教聖エルモゲンをして靈感に満ちた布告を義勇軍に宛てて書かせ発布させた方である。この布告を読み、自らの敵を祖国の土地から追いやったのが、かの義勇軍であった。
(下線協調は引用者)

ここには、「115年前のかの聖なる日々に」とある。これは、1812年にナポレオン率いるフランス軍を撃退した、ロシアでいわゆる「祖国戦争」を指している⁶⁵。また、「その 200 年前に」とある。これは、リューリク王朝断絶後にポーランドとスウェーデンがそれぞれ傀儡王朝の擁立を企てた動乱時代を指している⁶⁶。アントニイは、1927年当時にロシアの政権の座に就いていたソ連共産党を、ナポレオンやポーランドの傀儡帝に準えているのであるが、彼らをロシアから追放したのは、「かの義勇軍」であったという。実に、亡命者の多くが内戦でポリシェヴィキに反対して組織された義勇軍の将校と兵士、またその家族であった。そのことを考えると、アントニイが次のように回状を締めくくったことがよく理解できる。

このこと全体に鑑みると、我が書簡を、晩堂課における祭日前カノン第九歌頌の引用により終えることはまさに当を得ているだろう。ここで挙

げられているのは、自分により生まれたばかりの神の御子を連れた清き乙女の話なのである。

「奇妙な汝の生まれにおいて自然の理を超えてあらゆる病を逃れ、喜ばせたる、永久の子よ、今こそ汝はヘロデから見て魂を揺さぶる悲しみの剣により逃れたる者、汝を敬う者らを救え。エジプトの地へ向かい、おお母よ、そうだ、手で造られたもの（偶像）は地震により倒れるだろう。我が魂を徒に捜し求める敵を地獄へ送り、ひとり大権ある者として汝を敬う者を挙げて救うだろう。」⁶⁷（下線協調は引用者）

クリスマスの回状を、クリスマスのエピソードで初めて、クリスマスのエピソードで終えることは、特に珍しいことではない。しかし、クリスマスのエピソードの中でも、初めての息子を守るために国外へ逃れ、苦しい生活をしたに違いない母マリアへの賛歌で終えることは、読み手によく配慮するアントニイの姿勢を表しているといえるだろう。

10 おわりに

東方キリスト教は、基本的に、ニケヤ・コンスタンチノーブル信条を通して4世紀に迫害から解放されたキリスト教世界の一致を図ろうとした人々との繋がりを、また、イコンを通して8世紀にローマ帝国でキリスト教を守ろうとした人々との繋がりを言挙げする宗教である。4世紀に帝国の迫害から解放された人々は、『新約聖書』に記されたイエスという人物に神と人両方の像を認め、8世紀にイコンを守ろうとした人々は、ニケヤ・コンスタンチノーブル信条に表された神論と人間論を守ろうとした。東西

キリスト教の分離については、様々な背景、原因、理由が論じられているが、東方キリスト教世界における人の繋がり、東西ローマ帝国の分離と教会の分離に悩み苦しんだ人々との繋がり、迫害下で自らの責務を問うた人々との時代も国も超えた繋がりである。このように、東方キリスト教は、時代と国を超えた繋がりの中に常に自己を定位させようとする不断の知的営みと結びついている。

アントニイが生きた時代は、19世紀後半から20世紀前半であり、彼はとりわけ戦間期に国を超えて働いた。彼は常に教会の組織としての働きを尊重して、その決定に従ったが、信徒の求めに応じて、自らを政治的危険にも晒した。彼の開示した意見は政治的右派のものだったため、ロシア革命後に一時期は冷遇されたが、彼に支えられた人々は彼の隠退を許さなかった。彼は困難の中にいる人々を繋ぐ役割を求められたのであり、彼が中心となって創設した在外ロシア正教会は、本来は各地の移民を繋ぐプラットフォームとなるべきものであったが、その創立時に政治的繋がりの中に置かれたため、その後も政治的な繋がりを疑われた。実際はその反対に、政治的な繋がりから信仰による繋がりへの自律と尊重へと転換を試みた。むしろ、時代の趨勢はそれを許さなかったが、その試みがあったことは認める必要がある。

アントニイが本国の教会との間で政治的な対立に置かれたのは1927年のことであった。この年のクリスマスにアントニイは世界に離散した信者に書簡を送ったのであるが、彼は、その書簡を通して、イエスの母マリア、ベツレヘムの牧人と占星術師、町の住人、そして、読者と同じ労苦を体験し克服した祖先、同時代に生きた祖国の同胞と読者を繋げようとした。このことは、信条およびイコンを定めた人々と同じ意図のもとでアントニイ

が活動したと同時に、与えられた時代に生きる指導者として課題を担ったことを示している。

最後に、西洋近代史は、いわゆる民主主義と政教分離の実験の歴史という側面を持っている。現在、日本が民主主義国家になってからおよそ70年が過ぎたが、この側面に光を当て、西洋の歴史から学ぶことはまだまだたくさんあるように思われる。西欧史と米国史がその貴重なサンプル源であることはよく知られているところであろうが、ロシア史もロシア正教会史もまたそうであることを本稿は示していると思われる。

1 本節の参考文献は次の通り。アズィズ・S・アティーヤ 2014.『東方キリスト教の歴史』村山盛忠訳、教文館。新谷淳一 2006.「文芸・文学・文学史—文学概念の歴史性」『フランス語フランス文学研究』89。猪瀬優理 2019.「新宗教におけるジェンダー—信仰体験談と生命主義的救済観」『宗教研究』第93巻第2輯。近藤喜重郎 2010.『在外ロシア正教会の成立—移民のための教会から亡命教会へ』成文社。齋藤博 2002.「文明学における比較と批判—知の組み換え論として」『文明研究』第19号。伊達聖伸 2013.「書評：土屋博(2013).『宗教文化論の地平—日本社会におけるキリスト教の可能性』北海道大学出版会。」『宗教研究』第87巻第3輯。友枝敏雄・山田真茂留 2005.「戦後日本における社会学の〈知〉の変遷—社会学テキストを素材にして」『社会学評論』56(3)。森安達也 1978.『キリスト教史Ⅲ—世界宗教史叢書3』山川出版社。森安達也 1991.『東方キリスト教の世界』山川出版社。

2 2019年9月刊行の『宗教研究』(日本宗教学会)では、「ジェンダーとセクシュアリティ」が特集され、その巻頭論文(猪瀬 2019)によると、「宗教に限らず現代社会における諸問題を学術的に研究するためには「ジェンダーの視点も必要」なのではなく、「ジェンダーの視点が不可欠」である」という。むろん、猪瀬(2019)の述べる通り、包括的な概念を提出するために事実の積み重ねが必要である。しかし、である。ジェンダー論の目的は、ジェンダー毎の差異の詳細に終始することではなく、「人とは何か」という問題の解決、言い換えれば、人を包括的に規定しうる概念の提出とそれに基づいた平等な社会のデザインなのではなからうか。

3 文明の定義については齋藤(2002)を参照。

4 「超域的」という言葉は、ふつう「領域を超えている」という意味であるが、ここでいう「領域」の意味合いは多様である。近年の研究では、例えば、友枝・山田(2005)は「政治・経済・文化」の区分を取り上げているが、新谷(2006)はこれに「学術」「芸術」を加え、伊達(2013)は「教育・地域・時代」を加えている。本稿ではこうした先行研究の分類を踏まえ、「政治・経済・学術・芸術・教育の文化的諸領域およびこれに基づく時代区分と空間的区分を超えている」ことを超域的とみなす。なお、ここに示唆した通り、時代区分と空間的区分は、自明のものではなく、個々の文化的諸領域によって定められているため、その相互関係の解明もひとつの課題となるが、こ

ここではそのことを指摘するにとどめておく。

⁵ 本稿は、近藤（2010）の資料と考察に基づき、本稿の主題に沿って再考察したものである。

⁶ 東方キリスト教という言葉の意味合いについては、森安（1978）、森安（1991）、久松（2012）、アズィズ（2014）を参照のこと。

⁷ 久松 2012：199。

⁸ 正確にいうと、アレクサンドリアには後述のカルケドン派と非カルケドン派にそれぞれ教皇がいるため、キリスト教世界には教皇を名乗る人物が3人いる勘定になる。なお、2017年に来日したアレクサンドリアの教皇について、日本の外務省は、「コプト教皇」と言い表して、ローマ教皇と区別している。外務省「報道発表：河野外務大臣とタワドロス2世・コプト教皇との会談」（URL：https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/press4_004949.html）より。参照年月日：2019年8月13日。

⁹ 本節の参考文献は次の通り。ウェア 2017.『正教会入門—東方キリスト教の歴史・信仰・礼拝』松島雄一監訳。カヴァルノス 1999.『正教のイコン』高橋保行訳、教文館。黒川知文 2011.「日本語版監修者序文」メドヴェドコヴァ『ロシア正教のイコン』黒川知文監修、遠藤ゆかり訳、創元社。ゴンザレス 2002.『キリスト教史上巻—初代教会から宗教改革の夜明けまで』石田学訳、新教出版社。高橋保行 1998.『知られていなかったキリスト教—正教の歴史と信仰』教文館。南雲泰輔 2016.『ローマ帝国の東西分裂』岩波書店。パース 198).『パース著作集2 記号学』内田種臣編訳、勁草書房。水口優明 2013.『正教会の手引き』日本ハリストス正教会教団全国宣教企画委員会。

¹⁰ 《Молитва Символ веры - краткое и точное изложение основ христианского вероучения, составленное и утвержденное на 1-м и 2-м Вселенских Соборах.》 // Православие и мир: Молитва Символ веры (URL: <https://www.pravmir.ru/simvol-very/>) より。《Символ веры - это молитвословие, в котором содержатся все основные положения и догматы Православной Церкви. Это учение в Символе веры изложено в краткой, но очень точной форме. Составлен он в IV веке отцами I и II Вселенских Соборов. Состоит он из двенадцати положений, или членов.》 // Православие.ру: СИМВОЛ ВЕРЫ (URL: <http://www.pravoslavie.ru/104596.html>) より。以上、参照年月日 2019年8月13日。

¹¹ 水口 2014：35。

¹² 久松 2012：172-174。この修正をめぐる是非が、東西カトリック教会（後の正教会とローマ・カトリック教会）の不和の一因となった。

¹³ 言葉は条件付きで機能する。例えば、「豚」という言葉がある。これは生物学上の分類でいうと、「哺乳動物、有蹄類、偶蹄目、反芻目、猪科、豚族に属する家畜」を指し、家畜化の目的は主に食用に供することにある。豚は現代の日本人の食卓においても、たんばく源として貴重な存在である。ところが、この言葉を、例えば、人に対して、「おい、この豚!」というように比喻として用いると、「貴重な存在」という意味が失われ、罵りの言葉に転換される。

¹⁴ なお、パース（1986）では「図像」ではなく、「類似記号」と訳されている。

¹⁵ 黒川 2011：1。

- 16 ニケヤ・コンスタンチノーブル信条によって言い表された信仰では、『新約聖書』に記されたナザレのイエスは、人となった神であるという。『旧約聖書』の神は目に見えないので、これを目に見える形に描き出すことは偶像を造ることになるが、『新約聖書』において神が人となったのであれば、目に見えることになるから、これを描き出すことは偶像を造ることにはならない。ウェア 2017 : 44-49。
- 17 図像にも慣習性があることは、ロマン・ヤコブソンによって指摘されている。
- 18 本節の参考文献は次の通り。荒井献 1997. 『新約聖書外典』講談社。荒井献 1998. 「使徒教父文書の世界」荒井献編『使徒教父文書』講談社。イヴ・ブリュレ 2007. 『カトリシズムとは何か—キリスト教の歴史をとおして』加藤隆訳、白水社。ウェア. T. 2017. 『正教会入門 東方キリスト教の歴史・信仰・礼拝』（松島雄一監訳）新教出版社。木ノ脇悦郎 2017. 『宗教改革の人間群像—エラスムスの往復書簡から』新教出版社。タイセン. G. 2012. 『イエスとパウロ—キリスト教の土台と建築家』教文館。ダニエルー. J. 1996. 『キリスト教史 1 初代教会』上智大学中世思想研究所編訳監修、平凡社。東京神学大学神学会編 2018. 『新キリスト教組織神学事典』教文館。パークレー. W. 2009. 『新約聖書のギリシア語』滝沢陽一訳、日本キリスト教団出版局。久松英二 2012. 『ギリシア正教 東方の智』講談社。久松英二 2018. 『古代ギリシア教父の霊性—東方キリスト教修道性と神秘思想の成立』教文館。マルー. H. I. 1991. 『キリスト教史 2 教父時代』上智大学中世思想研究所編訳。森安達也 1978. 『世界宗教史叢書 3 キリスト教史Ⅲ 東方キリスト教』山川出版社。森安達也 1991. 『東方キリスト教の世界』山川出版社。
- 19 タイセン 2012 : 13。もしタイセン (2012) の仮説が真実であるなら、パウロを追い、パウロの立てた教会に現われた遍歴教師たちは、エルサレム教会から派遣されたのではなく、ガリラヤでイエスから派遣された人々とその後継者であるということになる。
- 20 2世紀から3世紀にかけて正統派も、また正統派から異端のレッテルを貼られたセクトの側も、自分たちの教えの正当性を使徒性によって権威付けようとした点では同じであった (荒井献 1997 : 15)。
- 21 イヴ・ブリュレ 2007 : 9-10 ; 20-21。
- 22 荒井 1998 : 19。ウェア 2017 : 24。ダニエルー 1996 : 42。
- 23 タイセン 2012 : 126-127。
- 24 ローマ・カトリック教会で「司教」、プロテスタント諸派で「監督」と訳される。ウェア 2017 : 24-26。ダニエルー 1996 : 99-100 ; 115 ; 118 ; 165 ; 256 ; 269 ; 273 ; 370。森安 1978 : 6-9。なお、ウェア (2017 : 24-26) は、2世紀に殉教したアンティオケアの主教イグナティオスとカルタゴの主教キプリアヌスに依拠し、主教職の唯一性を説明している。
- 25 久松 2018 : 28-30。
- 26 キリストは特定の使徒に真理を伝えたと言主張するグループを異端と見なし、使徒は等しく真理を伝えられたと言主張するグループが共同の教会を名乗るようになった。キリストから全使徒、全使徒から全主教へという真理の伝達経路の理念は、使徒継承の教え (主教職を使徒職の継承者とする教え) に結実した。
- 27 森安 1978 : 7。ウェア 2017 : 28。
- 28 森安 1991 : 13-15。
- 29 ウェア 2017 : 36。
- 30 例えば、北イタリアの教区数は、西暦 300 年頃の 5 または 6 から 400 年頃の 50 に、ガリア地方の主教座は、314 年の 22 から 400 年頃の 70 に増えていた (マルー 1996 : 148)。
- 31 ロシア革命の起こった 1917 年の 24,000 人から 1921 年の 733,000 人へ。
- 32 マルー 1996 : 223-229。

33 ローマ帝国の東西分治の展開については、南雲（2016）を参照。

34 久松 2012：50-52；172-176。

35 このグループについては、アズイズ・S・アティーヤ（2014）を参照。

36 ウェア 2017：19。

37 聖書の扱いについては、久松（2012：90）を参照。

38 ウェア（2017：223-224）によると、正教会では「聖書は聖伝の一部である」と考えるという。すなわち、聖伝は、「聖書の諸文書、信経、全地公会議の決議事項、教父の著作、教会法、祈祷書、イコン」を指し、ウェアはこれを、「正教会が何世紀にもわたって明らかにしてきた教義、教会統治のあり方、祈り、霊性、芸術の統合された全体と言ってよい」という。これは、ローマ・カトリック教会で放棄された人文学の伝統に則った聖書観であり（木ノ脇 2017）、現代の人文科学における聖書研究に通じる。つまり、聖書によって信仰を養われている、聖書が信仰の源であると言っても、オリゲネスより1000年以上後に「聖書のみ」を掲げたプロテスタント諸派とは解釈の前提が異なる点に注意が必要である。

39 パウロのみを使徒と認め、パウロ書簡とルカ文書のみを正典としつつ独自に改訂し、他の文書を退けたマルキオンや、現行の新約聖書には含まれなかった文書を正典とするグループのこと。

40 本節の参考文献は次の通り。ウェア. T. 2017. 『正教会入門 東方キリスト教の歴史・信仰・礼拝』松島雄一監訳、新教出版社。近藤喜重郎 2010. 『在外ロシア正教会の成立—移民のための教会から亡命教会へ』成文社。中村健之介 2011. 『宣教師ニコライとその時代』講談社。Митрополит Антоний (Храповицкий). Собрание Сочинений. Том 1. М.: ДАРЪ, 2007.

41 Митрополит Антоний (Храповицкий). Собрание Сочинений. Том 1. М.: ДАРЪ, 2007.

42 中村 2011：203-214。

43 若い人々が熱心にトルストイの影響を受ける中、トルストイがドイツ汎神論の影響を受けて深い懐疑主義に陥っていると批判した。

44 そこは、16世紀までカザン汗国というモンゴル系の国があった地域で、19世紀の当時は、アジアへの宣教師を養成する最前線ともいうべき土地柄であった。

45 例えば、ロシア政府はオスマントルコに対して、コンスタンチノーブルをギリシア人に引き渡すよう要求すべしであると主張し、また例えば、エルサレムをロシアに引き渡すよう要求すべしと主張した。

46 ロシア語で синод。主教（独身の高位聖職者）が構成する常設の教会管理機関。帝政時代はその議員と議長を皇帝が指名したが、1917年の革命後には、全ロシア公会が選挙によって議員を、そして、議員の互選によって議長を選出した。

47 本節の参考文献は次の通り。近藤喜重郎 2010. 『在外ロシア正教会の成立—移民のための教会から亡命教会へ』成文社。Граббе (Епископ Григорий) 1992. К истории русских церковных разделений за границей. Джорданвилль. Деяния Русского Всезаграничного Церковного Собора, состоявшегося 8-20 ноября 1921 года (21 ноября - 3 декабря) в Сремских Карловцах в Королевстве С., Х. и С. Кабузан В. 1996. Русские в мире: Динамика численности и расселения (1719-1989). Формирование этнических и политических границ русского

народа. Спб.

⁴⁸ Граббе 1992 : 57-58。

⁴⁹ Кабузан 1996 : 5, 230 より筆者作成。

⁵⁰ Деяния Русского Всеаграничного Церковного Собора, состоявшегося 8-20 ноября 1921 года (21 ноября - 3 декабря) в Сремских Карловцах в Королевстве С., Х. и С.より。

⁵¹ 本節の参考文献は次の通り。Губонин М. Е. 1994. Акты Святейшего Тихона, Патриарха Московского и всея Руси, позднейшие документы и переписка о каноническом преемстве высшей церковной власти. 1917 - 1943 гг. М. Деяния Русского Всеаграничного Церковного Собора, состоявшегося 8-20 ноября 1921 года (21 ноября - 3 декабря) в Сремских Карловцах в Королевстве С., Х. и С. Евлогий (Митрополит, Георгиевский). 1994. Путь моей жизни: Воспоминания. М. Сос. Покровский. Н.Н. 1997. Архивы Кремля: Политбюро и церковь 1922 - 1925 гг. Новосибирск. Розянко М. 1954. Правда о Зарубежной Церкви по документам и личным воспоминаниям. Нью-Йорк.

⁵² Деяния Русского Всеаграничного Церковного Собора, состоявшегося 8-20 ноября 1921 года (21 ноября - 3 декабря) в Сремских Карловцах в Королевстве С., Х. и С. С. 49-51.

⁵³ Губонин 1994 : 193。

⁵⁴ Губонин 1994 : 193。

⁵⁵ Покровский 1997 : 162-163。

⁵⁶ Розянко 1954 : 6。

⁵⁷ Евлогий 1994 : 370。

⁵⁸ 本節の参考文献は次の通り。近藤喜重郎 2010. 『在外ロシア正教会の成立—移民のための教会から亡命教会へ』成文社。Губонин М. Е. 1994. Акты Святейшего Тихона, Патриарха Московского и всея Руси, позднейшие документы и переписка о каноническом преемстве высшей церковной власти. 1917 - 1943 гг. М. Деяния Второго Всезарубежного Собора Русской Православной Церкви за границей с участием представителей клира и мирян, состоявшегося 1/14 - 11/24 августа 1938 года в Сремских Карловцах в Югославии. 1939 г.

⁵⁹ Губонин 1994 : 510-512。

⁶⁰ 実際にその願いが果たされることはなく、ナチスドイツのソ連侵攻まで教会への迫害が止むことはなかった。ナチスは、占領地で教会迫害を停止させ、自分らへの支持を信者から取り付けようとしたため、スターリンも迫害の手を緩めざるを得なくなったのである。

⁶¹ Митрополит Антоний (Храповицкий). Собрание

Сочинений. Том 1. М.: ДАРЪ, 2007.

⁶² Деяния Второго Всезарубежного Собора Русской Православной Церкви за границей с участием представителей клира и мирян, состоявшегося 1/14 - 11/24 августа 1938 года в Сремских Карловцах в Югославии. 1939 г.より。なお、このように発展した在外ロシア正教会であったが、翌年、ナチスドイツがポーランドに侵攻して第二次世界大戦が勃発し、ヨーロッパの地図が塗り替えられていくことにより、在外ロシア正教会の情勢も大きく変化していくことになる。

⁶³ Окружное посланіе Предсѣдателя Архіерейскаго Синода Русской Православной Церкви за границей Высокопреосвященнаго Митрополита Антонія ко дню Христова Рождества. // Церковныя Вѣдомости, издаваемыя при Архіерейскомъ Синодѣ Русской Православной Церкви за границей. № 23-24 (138-139). - 1 (14) - 15 (28) декабря 1927 года. - Новый Садъ: Типографія «Натошевичъ», 1928. - С. 1-2. URL: http://slovo.russportal.ru/index.php?id=alpha bet.a. anthony01_004 より。参照年月日 2019年8月15日。

⁶⁴ 15世紀にローマ帝国が滅亡すると、ロシアは正教の王を擁する唯一の国となった。このことを寿いだ時の修道士が、ロシアの旧名ルーシを取って、「聖なるルーシ」といい、モスクワは第三のローマであるといった。

⁶⁵ ロシア人の中では、ナポレオン軍を敗走させた出来事を「祖国戦争」と、ナチス軍を破った第二次世界大戦を「大祖国戦争」と呼び、歴史上、特別視する。

⁶⁶ ポーランド王は、傀儡政権を通してロシア人のローマ・カトリックへの改宗を目論んだ。これに反対した時のモスクワ総主教エルモゲンは、反乱を呼び掛ける回状を全国に発布したために投獄され、1612年に獄死した。ロシア正教会は彼を1913年に列聖している。

⁶⁷ 日本正教会で歌われている歌詞は次の通り。「無原なる子よ、我爾の奇異なる産の時に性に超えて病を免れて讚美せられたり、今は爾がイロドより逃るを見て、我が霊哀の剣にて刺さる。祈る、爾を尊む者を救ひ給へ。嗚呼母よ、我エギペトの地に往けども、エギペトの手に作られし者を震はせて墜さん、且徒に我が生命を索むる敵を地獄に遣して、独権能あるに因りて、爾を尊む者を挙げて救はん。」(URL: http://www.orthodox-jp.com/liturgy/prayerbook/feast/0106Day_before_Xmas.html) より。参照年月日: 2019年9月9日。